歴史地理学　50－1（237）19～33　2008. 1

韓国ソウルにおける都市景観の変遷

李　恵恩（東国大学校）
訳　古田悦造

Ⅰ．序論
Ⅱ．ソウルの水平的拡大
（1）19世紀後期から20世紀中期まで
（2）20世紀後半
Ⅲ．ソウルのスカイラインの垂直的変化
Ⅳ．21世紀への歴史的・文化的都市
Ⅴ．結論

Ⅰ．序論

1394年に朝鮮王朝の首都として選ばれて以来，ソウルは610年以上にわたって韓国の中心都市であり首都であった。他国とは異なり，ソウルは郊外地域を有しないものの大都市であった。そしてソウルは，人口と面積で世界における大規模な都市の１つであった。

現在のソウル市域内に人々が居住し始めたのは新石器時代からで，石寺洞先史遺跡地をはじめ各地に青銅器時代の住居跡が発見されている。漢江流域のソウル地域は，新羅が３つの国を統一した７世紀までは，その都市域は戦闘の場であった。事実，百済は漢江に沿った現在のソウルの南東部に国家を形成した。この位置は，現在風納土城遺跡地として知られている。このことは，ソウルという都市が，千年以上に及んで人々が住むことに対して重要かつ最適な位置であったことを意味している。

新羅によって３国が統一され，さらに高麗時代に開京が都として選定されたことによって，ソウルの中心性は薄れることとなった。高麗時代の末期においては，風水思想に基づいてソウルに南京が設置され，ソウルへの遷都を志向されたこともあった。しかし，狩猟場として利用されたのみで，開京の周辺地域としての役割を果たすのみであった。ソウルは朝鮮時代に至り首都として選定され，重要な居住地として注目されるに至った。

ソウルにおいて，朝鮮時代に形成された計画都市としての都市景観は，韓国に西洋文明が導入される19世紀までは，基本的にその空間構造に変化はみられなかった。

それは，この都市が城壁に囲まれ，この城壁が都市の拡大を妨げる要因となっていたためであった。，李氏朝鮮期に漢城府であった古いソウルの都市域は，城壁都市を含む城壁から４kmの周辺地区であった。

かつて韓国が開国した時，諸外国人が韓国とりわけソウルに居住し始めた。中国人や日本人を含む外国人は，それぞれの様式の建物を建築し始めた。このような状況はこの都市の都市景観を変化させることとなった。

本稿は，ソウルという都市の変遷を，特に19世紀後期以降に関して明らかにするものである。具体的には，時代的な水平的拡大と垂直面での時期的変化の２つの側面から検討する。

キーワード：ソウル，都市景観，土地利用

Ⅱ．ソウルの水平的拡大

(1) 19世紀後期から20世紀中期まで

ソウルは周囲の自然環境と調和するように企画・計画され，４つの基本的な山岳によって守られていた。大部分の建物は平屋建てで，都市のスカイラインはほとんど平坦であった。19世紀後期までには人口が増加し，居住地区が拡がったものの，空間的構造はそれほど変化しなかった。

外国人は密集して居住した。たとえば日本人は忠武路近くに集住し，中国人はフンリョンワン路に住み，西洋人を主とした他の外国人は貞洞地区に集住した。日本による韓国の植民地後，日本人の居住地は拡大したが，主に清渓川の南部に分布していた。中国人は幾分かは分散したものの，鐘路３街や西小門近くに密集するようになり，現在は中国大使館が立地している。

最初の西欧様式の建物は貞洞に建てられ，明洞大会堂はソウルのスカイラインを変化させた。都市の城壁は，電車や鉄道や他の目的によって破壊された。巨大な西欧様式の建築物を始めプラザや２階建ての日本式家屋が建てられた。

このような傾向は，韓国併合後さらに強化された。1914年に行政組織が再編成され，ソウルの都市名は京城府に変更され，歴史的な都市部の範囲は縮小した（図１）。図２は，1914年におけるソウルの土地利用パターンを示したものである。宅地は主に旧城郭都市の内部に集中するとともに，東部と西部の城壁近くや漢江に向かう南部に拡大した。現在の都市部の大部分は緑地や耕地であった。このような都市景観の形態は，李氏朝鮮末期から継続していた。

1936年に至り，都市の境界は，ほぼ李氏朝鮮期の漢城府の都市範囲と類似するほどに変化した（図１参照）。都市人口は急激に増加し，居住地区は拡大した。都市は，南部の日本人居住地区と北部の韓国人居住地区といったように，民族集団による居住地区の2つの構造を明確に示した。

宅地は郊外へと拡大し続け，公共交通網とりわけ電車や鉄道は居住地区の拡大に役割を果たした。このような水平的拡大は継続的になされていた。ソウルにおいては，伝統的な韓国式の家屋と日本式の家屋そして西欧様式の建築物が混在していた。

日本の植民地時代においても李氏朝鮮の行政的地区は変化せず，工業地区は都市の東部や南部に分布し，商業地区は２つの異なった地区で発展した。すなわち，１つは鐘路と南大門路の伝統的な商業地区で，他の１つは日本人によって発展した明洞地区である。この土地利用パターンは，1939年に明確な利用目的で明確な地区を選定する都市的土地利用の計画が形成される以前からみられていた。

(2) 20世紀後半

1945年の日本統治からの解放と朝鮮戦争は，ソウルの都市を混乱へと陥れた。このため都市は混沌とした状態となった。都市のインフラの大部分は破壊され，多くの人々が海外から帰国し，多くの避難者が北部から南部へと移動した。こうした一方では，1949年に再び宅地化を基盤とした地区が付加された（図１参照）。

朝鮮戦争後，ソウルは多くの方面で発展し始めた。都市行政機関として，韓国における最初の都市計画であるソウル復興計画を打ち出した。とりわけ疎開していた行政組織がソウルに戻った後には，復興計画がかなり急速に遂行された。さらに電車や鉄道・バスが公共交通手段として再び機能し始めた。多くの家屋が建てられ，都市の復興と再整理実施された。そして，都市人口が大変急激に増加した。

1963年，都市の境界は，1974年にソウルに合併される北西部を除き，現在の都市の境界

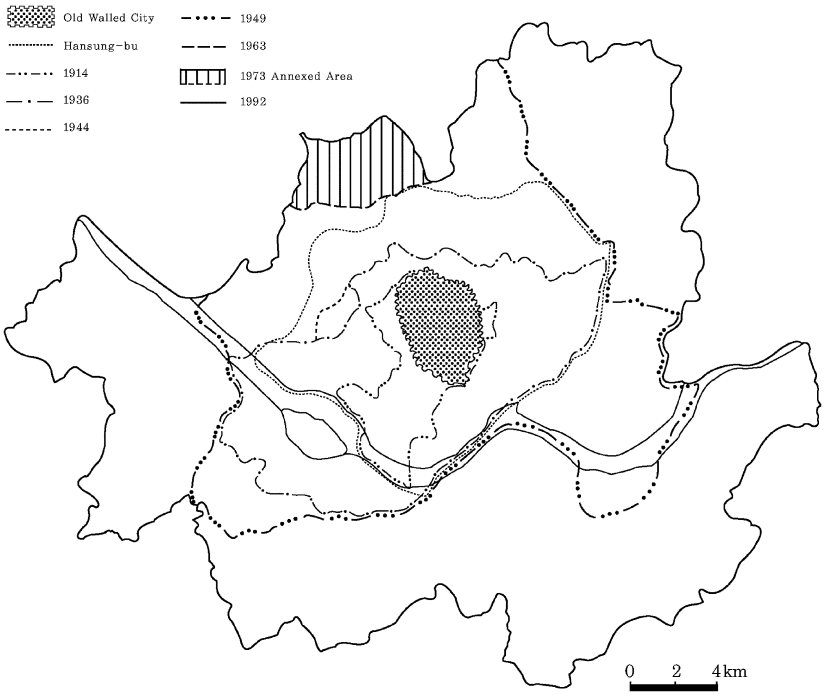

図 1　ソウルの境界変化

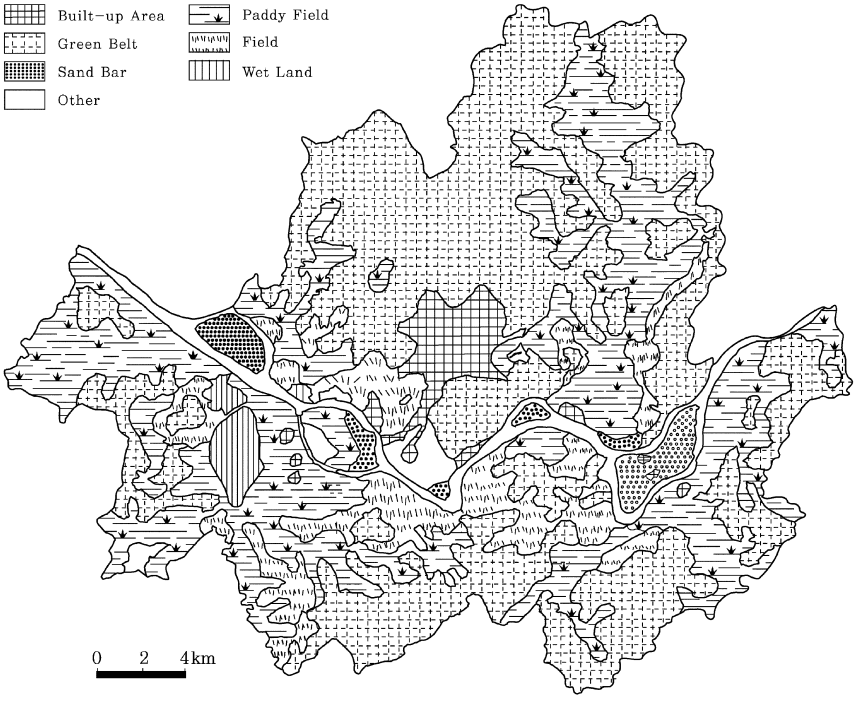

図 2　ソウルにおける土地利用パターン（1914年）

と同様な範囲まで拡大した（図３参照）。図３にみられるように，宅地は都市中心部や漢江南部の永登浦地区に限定され，郊外の地区は緑地や耕地といったオープン・スペースとして，まだ残されていた。

経済発展と人口の急増に伴い，住居や他のインフラに不足が生じた。このような新たな発展した居住地区は，都市行政機関によって漢江の南部，とりわけ北東部のヤン洞地区が発展した。居住地区の発展によって土地が開拓され，漢江の南北を結ぶ橋が建設された。中心業務地区では高層ビルが建設され，５階建てのものを中心に15階建て以下のアパートが建てられ始めた。

経済発展とともに，継続的に人々がより良い仕事や居住機会を得るために，ソウルに流入してきた。バスが都市の主要な公共交通機関となって以降，居住地区に関して移動のための空間的障害がなくなった。事実，バス網は新たに発展した居住地区でも利用できるようになった。このようなバスや自動車による移動の拡張は，宅地の拡大に対して重要な役割を果たした。

図４に1979年のソウルにおける土地利用パターンを示したように，宅地は1963年のそれと比較して水平的に拡大した。漢江の北部地区の大部分は緑地を除いて宅地化され，一方新たに発展した居住地区が立地した南部地区ではまだ水田や畑地が残存していた。九老工業地区が都市の内側に立地した。

河川沿岸道路は河川航路に代わって建設された。高層ビルはCBDに建設され，再開発政策は下町に適用された。自家用車数が急激に増加し，新たな公共交通機関としての地下鉄が1974年に開通した。連続的な人口増加と企業の本社の立地は，漢江の南部の新しい発展地区における家屋・アパート・ビルの建設となった。

ソウルで1986年にアジア競技大会が，また1988年にはオリンピック大会が開催された。これらの大会の準備のために，競技施設や収容施設・ホテル・他の諸施設が都市の南東部に建設された。漢江に沿った東西方向の高速道路が建設され，多くのオープン・スペースにビルが建てられた。テヘラン道路は特化したオフィスビルの地区となり，漢南地域はソウル市民にとって魅力的な居住地域として，また高地価の地域としてみなされた。換言すれば，ソウル市民は漢南地域を，高度な消費地域として，より良い教育地域として，そして居住環境の良い地域として注目していたのであった。

Ⅲ．ソウルのスカイラインの垂直的変化

20世紀後期には宅地が拡大し，都市全体に広がった。前述の２つの大きな競技大会の誘致の成功は，ソウルが社会的・経済的地位が発展する契機となった。都市の再発展計画は，相対的に低層の密集地域で，より活発に実施された。下町では，高層オフィスビルが通常的に建設された（図５，図６）。一戸建て家屋・低層の密集アパートそして２世代・３世代家族の住居地区においては，再開発やアパートの再建築によって，高層で密集アパートが完成した。

1992年の土地利用パターンは，外辺地区に緑地帯が残ったものの，都市のほとんどの地域が宅地化されたことを示している（図７）。図は広範囲での複合アパートの展開を示している。とりわけ都市周辺でのニュータウンは，ソウルの南西部の木洞地区と北東部の上渓・中渓・下渓地区に完成した。超高層アパートは，いわゆる漢南地域と漢江に沿った新しい開発地区に立地した。

1992年の土地利用図を2005年のものと比較すれば，土地利用パターンは全体として変化はみられない（図７，図８）。住宅地は大なり小なり同じであり，九里工業地区はハイテク工業の２本の指状の地区に変化し，複合アパートが分布していた。これらが2005年にお

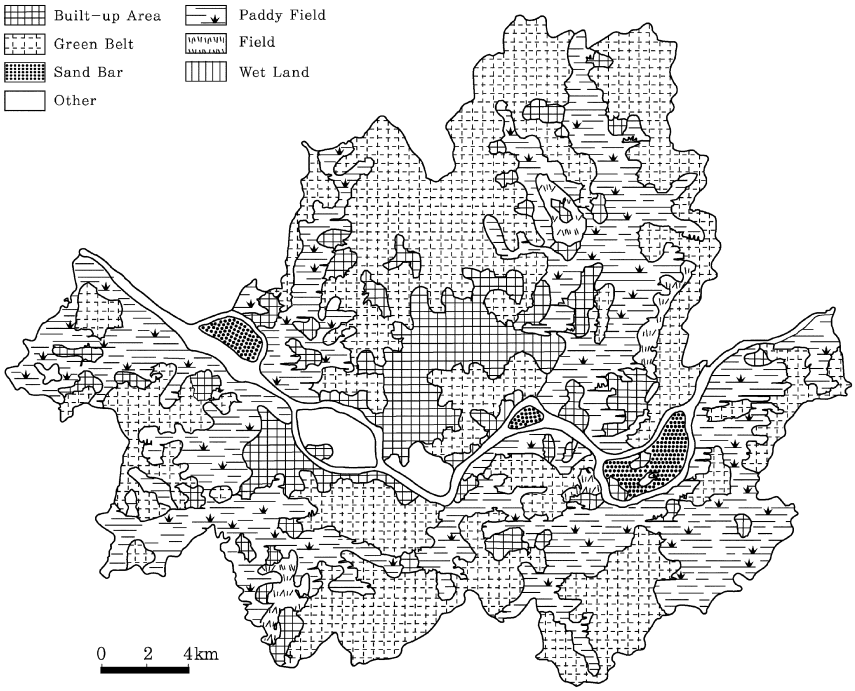

図 3　ソウルにおける土地利用パターン（1963年）

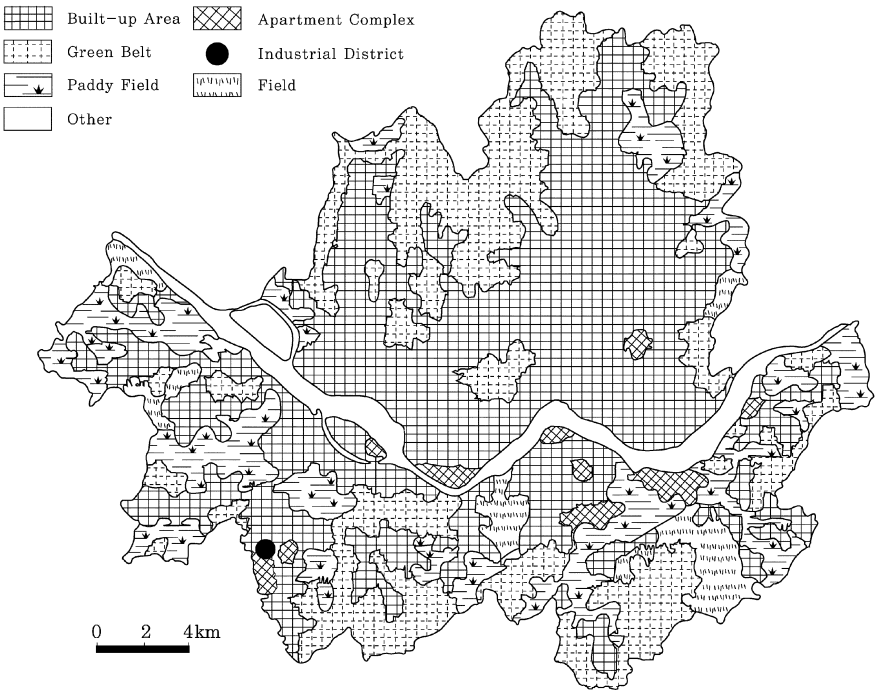

図 4　ソウルにおける土地利用パターン（1979年）

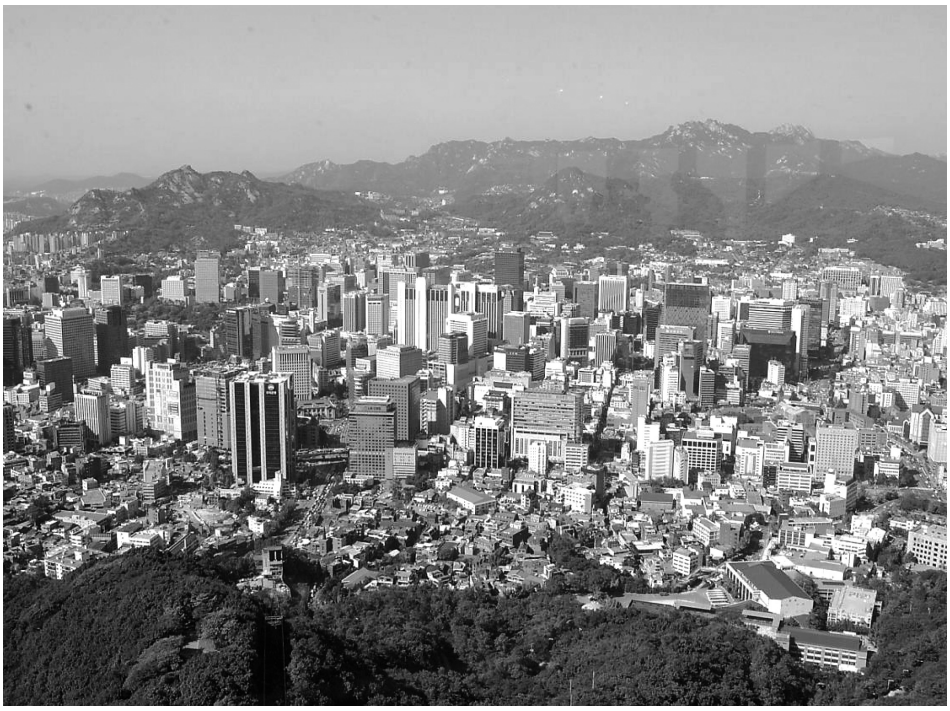

図 5　南山から見たソウルのCBD

図 6　都市の再開発プランによって建築された高層ビル

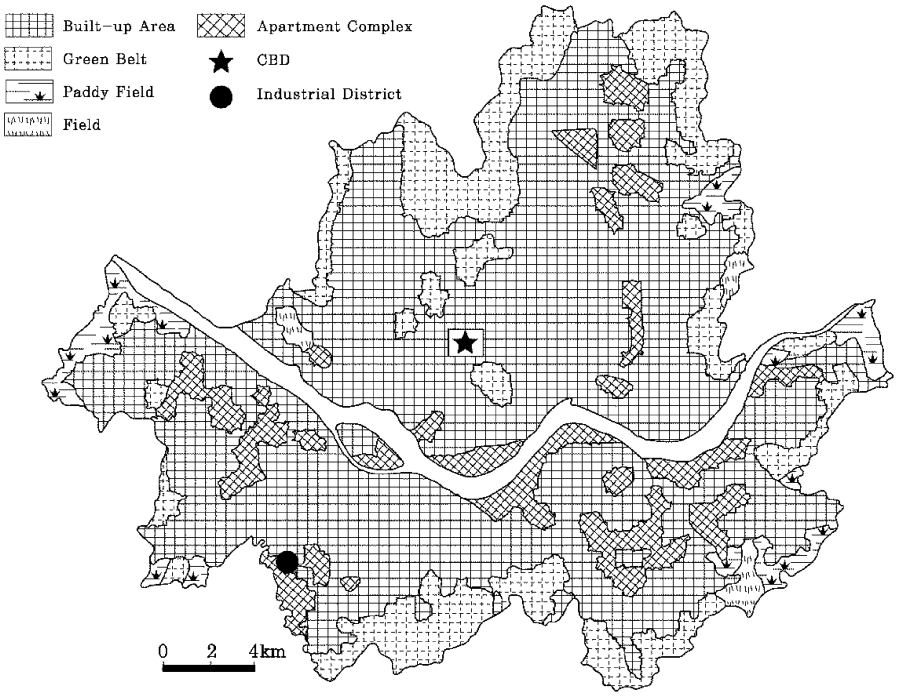

図7　ソウルにおける土地利用パターン（1992年）

図8　ソウルにおける土地利用パターン（2005年）

ける土地利用パターンの主要な変化であった。このことは，水平的な空間的拡大がなかったことを意味している。

しかしながら，まだ住宅の不足問題が存在していた。この住宅不足の問題と古いアパートを再建する必要性を解決するために，より高くかつ広いアパートに古いアパートを建て替え，また不法占拠地域や一戸建て家屋の地域で新しい高層アパートに建て替えた。オフィスビルも，以前のビルに比べてより高くかつ広い空間のビルに建設されてきた。新しく建てられたアパートは15階以上のものが，最も高いものでは55階のアパートも建てられた。

図９は，ソウルにおける住宅地化が水平的に拡大した過程に関して，時系列に示したものである。この図において，住宅地の状況は，図７や図８に示したように，1992年と2005年とにおいてと同様である。これは1992年から2005年の期間において，ソウルにおける空間構造が水平的のみならず垂直的にも，社会・経済的発展に基づく必要性によって改革・再整理されてきたことを意味している。超高層建築物の建設は，眺望権や日照権のために，近隣の共同社会に問題を生じた(図10)。

このような都市の景観の垂直的な変化は，住居用や商業用の建物の高さが次第に高くなることで証明される。事実，1990年代以後の住居用の建物は，それ以前の時期と比べ，高層マンションの建物が一戸建てよりかなり多かった。また，1996年以後は『ソウル統計年報』にも20階以上の高層マンションの建設に関する項目が含まれるようになった。また，商業用のビルも1990年代後半以後には，高いビルが建てられ，住居用のみならず商業用のビルも継続的に高層化が進展している。

2000年代に至り，商業用とともに住居用の建物にも超高層化が一層進んでいる。このような超高層のビルは，都市のスカイラインを変化させるのみならず，周辺地域における眺望権や日照権を侵害する問題を提起させている。例えば，図10に示すように超高層マンションの建設にあたって，伝統仏教寺刹である奉恩寺とその周辺住民からの建設に対する反対抗議が発生したこともあった。

今日，50階を超える超高層アパートは容易に見られる。オフィスビルが最初に建設され，居住ビルがこれに続いた。19世紀後期において，ほとんど平坦な平屋建ての家屋は周辺の環境と調和した初源的なスカイラインをみせていた。しかし，21世紀に高台の頂に建設された超高層のビルや他のビルは，一般的となり，都市の自然環境を考慮しなかったため，大いに異なった垂直方向のスイカラインを呈した。

ソウルの空間的構造は，世紀をわたって水平的拡大から垂直的変遷へと変化してきた。低層で密集したビル構造と土地利用パターンは，高層のビル構造と土地利用パターンに取って代わられた。このような傾向は，多少なりとも世界的な潮流であり，ソウルという都市だけが例外という訳ではない。

Ⅳ．21世紀への歴史的・文化的都市

経済的発展・人口の急増・ビル建設の増加・新しい道路の建設と広がる古い道路・地下鉄と自動車による交通網の発展そして工業構造の変化に伴って，ソウルの空間的構造は，最初は水平的に続いて垂直的に変遷してきた。結果として，多くのビルがソウルの都市を占拠した。そこで都市行政機関は，ソウルをビルの充填よりも心地よい都市の形成へと志向し始めた。

ソウルを歴史的・文化的都市として維持するために，市行政当局は政策の転換を試みた。行政機関は，自然に適応した都市や生態的都市を目指した。同時に，何よりも居住する人々に目を向けた人間中心の都市を重視し，主要道路の地下街よりも道路を横断する歩道に関心を向けた。

多くの生態的公園は都市の中に築かれた。

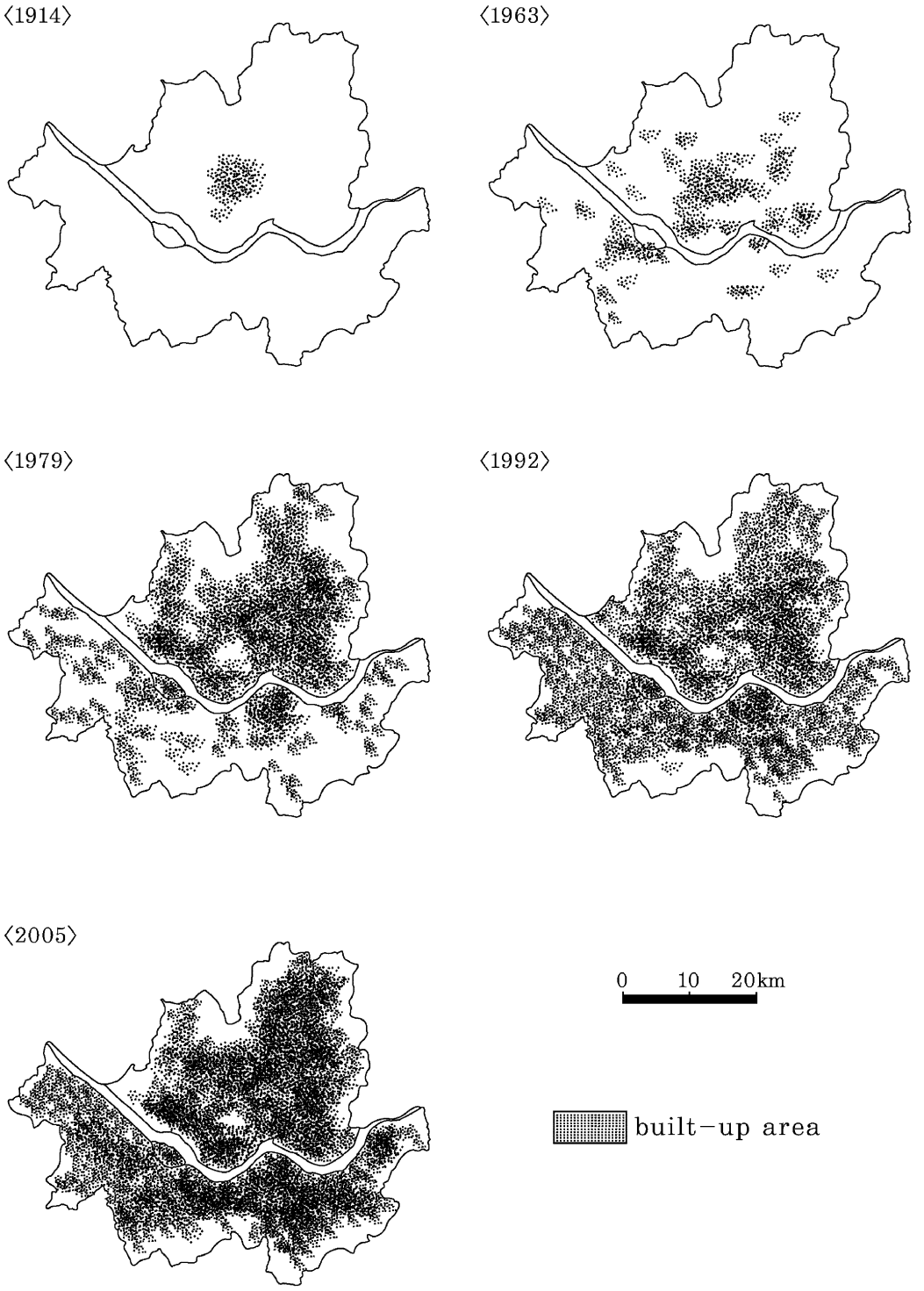

図 9　ソウルにおける住宅地域の空間的拡大

図10　漢南地区における超高層アパート

写真の左側にみえる低い建物は、仏教寺院の奉恩寺である。これらの高いビルは、近隣とりわけ寺院とは適合しないために、この寺院は会社やアパートのビルとは論争してきた。

とりわけ図８にはハヌル公園を示した。この場所は，もともとは漢江の中洲である蘭芝島に位置する（図２，３，４参照）。かつてここはゴミ捨て場であった。ゴミ捨て場としての役目を終えた後，そこでは植林のキャンペーンが行われた。現在，この場所は生態的公園として甦っている。この公園の他にも汝矣島生態公園やソウルの森仙遊島公園のような生態的公園が造られている。

歴史的都市や自然志向的都市に向けての特別なプロジェクトの１つとして清渓川の再生がある。李氏朝鮮期，この川は都市の中心部を流れていた。しかし，1950年代に清渓川は馬場洞まで覆われ，高架道路が清渓川道路の上に建設された。行政機関は覆われた道路を再び開放し，流れを再生することを決定した。

2005年，清渓川修復プロジェクトは成就し，この地区は人々に歓迎され，ソウルにおける（図11，図12），このプロジェクトは成功した事例として注目される。憩いの場所の１つとなっている。

他に，東大門の遊興地に対するプロジェクトは，同様に重要である。再開発計画によれば，この地区は南山までの緑の回廊を有する公園となる予定である。公的行政機関が立地している景福宮の前は，緑地化される予定である。図13の左上に位置する緑地部分は宗廟で，右下の部分が南山である。その中央にあった住・商複合建物がすべて撤去されることによって，その地区を緑地帯として再開発し，その周辺には住居・商業用高層建物が建てられる予定で，すでに施行段階に至っている。

都心再開発に関するさまざまな計画の内の

図11　復原された清渓川の最上流地点

図12　復原された清渓川の最下流地点
過去の高架道路の痕跡

図13　宗廟から南山までの緑地帯の予定地
楕円内にある住・商複合建物を撤去し、緑地帯が新しく建設される予定である。

１つは，東大門運動場の周辺地区における再開発である。この計画は，長期間にわたってソウル市民に慕われてきた運動場を撤去し，そこにかつての城壁を復原して公園化し，さらにデザイン世界広場を造成し，南山までのソウル市内における南北軸の緑地帯とするものである。2009年に完工予定の景福宮南方に位置する世宗路に建設する光化門広場も，もう１つの都心再開発計画である。図14は北岳山でから見たもので，景福宮と世宗路が見える。この地域は，かつて朝鮮時代には六曹があった場所である。現在，世宗路の中央部分に位置する緑地帯には，幅34ｍの広場を建設し，この地域の歴史を確認できるとともに市民が自由に使える公園とする予定である。

昌徳宮（世界遺産）・宗廟（世界遺産）・社稷檀・雲峴宮や他の建物を含む５つの宮廷は李氏朝鮮期から残っている。20世紀初頭に建てられたソウル鉄道駅や市役所・韓国銀行などは，ソウルの旧市街地に未だに存在している。これら残存する韓国式の伝統様式や西欧様式式の建造物はソウルの610年に及ぶ歴史を現している。

伝統的韓国式家屋が保存されている北村地区おそびその周辺において，伝統的韓国式家屋は新しく建て替えられ，居住用のみならず職場としてこれらの家屋を利用する方法を選択した（図15）。このことは，伝統的韓国式家屋に対する人々の認識が変わり，この傾向がソウルの都市景観に反映してきたことを意味している。

事実，ソウルの都市景観は，古さと新しさ，緑地帯と土地の高度利用，ビルと生態的公園が共存している。ソウルの都市景観を通して，人々はソウルの歴史を読み解くことができよう。

図14　景福宮と世宗路
楕円内に光化門広場が造られる予定である。

図15　北村の韓国式家屋

Ⅴ．結論

ソウルは，610年間にわたる首都であるとともに，韓国における最も大きな中心都市である。行政機関は，首都機能や行政機能を他の都市への移転を志向したものの，人々は移転に対して反対であった。このようにソウルは，しばらくの期間は首都であったし，あり続けるであろう。

ソウルの位置は，集落に適した場所として評価されてきた。それは，新石器時代から人々がこの地域に居住し始めた場所であり，３つの王国が争奪し合った場所でもあり，ソウルが李氏朝鮮の首都として選定されたことからも知れよう。

19世紀末まで李氏朝鮮におけるソウルの都市景観は，周辺の環境と適応した韓国式の建築物のみで，比較的平坦な様相であった。近代的西欧技術と文明の導入とともに，土地利用パターンと都市景観は変化し始めた。このことは，ソウルを韓国人と外国人とが居住し，民族集団によって異なった文化景観を呈する国際都市へと導いた。電車や自動車や他の個人的移動手段は都市道路を基盤としていた。伝統的な平坦なスカイラインは，明洞大会堂や他の西欧式建築物によって崩された。

人口増加と社会・経済的発展に伴って，ソウルは都市域の水平的な変化・拡充をみた。20世紀中頃に，高層ビルがCBDに建設された。宅地は広がらなかったが，ソウルの都市景観は垂直方向へと変化し始めた。オフィスのみならず居住用としての超高層ビルは，20世紀末に建設された。

21世紀におけるソウルの都市景観では，さらに緑地帯などの緑地をはじめとして，アパートを有する超高層ビルや交通手段としての自動車やバス・地下鉄網がみられるであろう。また一方では，満足し得てかつ新しく建てられた伝統的韓国式の建築物も存在しているのである。

〔参考文献〕

Kim, Kwang-Joong, ed., *Seoul, 20th Century: Growth & Change of the Last 100 Years*, SDI 20th Century Seoul Series, Seoul Development Institute.

Lee, Gyu-Mok, “Townscape and its Image of Seoul in the Late Joseon Dynasty,” *Seoul Studies*, 1, 1994, pp.149-166.

Lee, Ki-Suk, “Seoul’s Urban Growth in the 20th Century: From a Pre-modern City to a Grobal Metropolis, ”in Kwang-Joong Kim, ed.*Seoul, 20th Century:Growth & Change of the Last 100 Years* SDI 20th Century Seoul Series, Seoul Development Institute. 2003, pp.22-90.

Rii, Hae Un, “Residential Segregationby Ethnic Groups in Kyongsung-bu, ”*Geography*, 29, Korean Geographical Society, 1984, pp.22-36(in Korean).

Rii, Hae Un, “Residential Segregation by Ethnic Groups in Seoul, 1930,” *Dongguk Journa*l, 25, Dongguk University, 1986, pp.153-160.

Rii, Hae Un, “Impact of the Public Transportation on the Dvelopment of Seoul:1899-1968.” *Geography*, 37, 1988, pp.17-32 (in Korean).

Rii, Hae Un, “Changing Residential Segregation of Ethni Groups in Kyongsung-bu (Seoul): 1930-1935” *The Historical Geography(Rekishi-chirigakku)*, 160, (September), the Association of Historical Geographers in Japan, 1992a, pp.2-20(in Japanese).

Rii, Hae Un, “Residential Distribution by Ethnic Groups in Seoul, 1910-1945, ”*the Special City of Seoul Historical Review (The Hyangto Seoul)*, 52, 1992b, pp.105-155.

Rii, Hae Un, et.Al.Landscape Transformation of Seoul, Seoul Research Institute (in Korean). 1994,

Rii, Hae Un, “Foreign Influences upon the townscape of Seoul, Korea,” in Brian J.Shaw and Roy Jones eds.*Contested Urban Heritage:Voices from the Periphery*, Ashgate. 1997a, pp.156-168.

Rii, Hae Un, “The Impact of the Japanese on yhe City of Seoul, Korea”, *Deakin University Cen-*

tre for Australia-Asia Studies Research Paper Heritage in Asia Sries 97-6-H, Deakin University. 1997b.

Rii, Hae Un, "Coexistence of Traditional and Modern Landscape in Seoul," *The Geographical Journal of Korea*, 31, 1997c, pp.59-70.

Rii, Hae Un and Jae-Seob Ahn, "Urbanization and its Impact on Seoul, Korea," in Ian Douglas and Shu-Li Huang, eds.*Urbanization, East Asia and Habitat* Ⅱ UN NGO Policy Series 2., Chung-Hua Institution for Economic Research.2002, pp.47-70.

Rii, Hae Un, "Seoul Republic of Korea: Removing the Reminders of Colonialism," in William S.Logan, ed. *The Disappearing 'Asian' City: Protecting Asia's Urban Heritage in a Globalizing World* Oxford University Press, 2002, pp.74-87.

Rii, Hae Un, "Development of Transportation Network in the 20th Century Seoul," in Kwang-Joong Kim, ed.S*eoul, 20th Century:Growth & Change of the Last 100 Years* SDI 20th Century Seoul Series, Seoul Development Institute. 2003, pp.151-212.

Rii, Hae Un, "Changing Townscapes in the Ear of Globalization," *Journal of the Korean Urban Geographical Society*, 8-2 (Series No.15), 2005, pp.131-121.

Seoul Metropolitan City, 1997, 37th Statistical Yearbook.

Seoul Metropolitan City, 2007, 47th Statistical Yearbook.